

<座談会>かいま見た別世界：アジア・アフリカの横顔

著者	小田切 秀雄, 小原 元, 田中 喜一, 阪下 圭八
雑誌名	日本文学誌要
巻	7
ページ	103-111
発行年	1961-12-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019047

かいま見た別世界

——アジア・アフリカの横顔——

小田切 秀雄

訊く人 小原 元
田中 喜一 阪下 圭八

小田切 昭和三十五年の四月に神戸を船で出てその年の暮れに北極まわりの飛行機で帰ってきました。

小原 歩かれたコースは？

小田切 まず神戸を日本郵船の熱海丸という八千トンほどの貨客船で出たのですが、荷物と一緒に客が六、七人乗りました。一等待遇で飛行機よりもいくらか安いのですが、マルセーユまで三十五日かかりました。船のなかでフランス語をやるといふことと、途中のアジア・アフリカの港を見たいといふことで船にしたのです。船は東シナ海、インド洋紅海、それから地中海というふうに進み、途中の港々に寄るのですが、積み荷のある、あるいは荷をおろす港にしかとまらないから、セイロンへとまってくるといふなと思って、いたのにそれはダメで、台湾もキールンの予定だったのが急に高雄に変わってしまったとか、香港は一日でシンガポールが三日泊りになるとか、荷物の都合で左右されるということとはありましたけれども、船の旅というのはいいですね。いったん船に乗ってしまうと、それまでの日常状況から一時まったく遮断

されてしまう。だいたい沖縄の辺までいくと日本のラジオもほとんど入らなくなってしまう。むろん新聞などないわけですね。まあ無線で受けたニュースのほんの一部を、船内新聞という形のコンニャク版にして配ってくれるので、それによって多少のことを知る以外にはない。ちょうど安保闘争がそろそろはじまりかけたところで、また南朝鮮では反李承晩の暴動が起こった、そういう様子なんかも、そのコンニャク版で船内で知ったのですが、くわしいことがわからず実にもどかしかった。しかし、現代の非常に複雑化した社会生活から一応完全にたち切られてしまつて、そうして、ただ海ばかり眺めて暮らしているといふふうなことが、人生のある時期に生じたことをぼくは喜んだんです。同じ船で行った法学部の中村哲さんもやはり喜んでいました。それからアジア・アフリカのいくつかの港をほんの短い期間、ただ、かいま見たというだけではあつたけれども、とにかく見ることできたといふことはぼくにとっては重大なことでした。

田中 途中のいろいろな話をおうかがいしたいんですが、途中のアラブには非常に興味をおもちになったようですね……

小田切 西ヨーロッパのことは、いずれ次の機会ということにして、今日はだいたい途中のことをお話ししましょう。最初に船がとまったのは台湾の南部の高雄ですが、ずっと戒厳令がしかれている国ですから、ぼくらが上陸するときにも一々台湾の出入国管理官のメンタル・テストみたいなものを受け、とにかく上陸オーケーということになっておりたわけだけでも、船の出入口にはずっと警官が立っていました。街へ出ると貧しい生活が目につき、また一切にたいする軍事の優先という空気が濃厚でした。風俗はむろんすっかり中国風になっていて、かつての日本の植民地という面影は短時間の旅行者の眼に映るかぎりではほとんど吹きはらわれている。日本語が通じるのも、もう、だいたい三十何才以上という人だけですね。貧しい盛り場で屋台の食事をしたり、露地奥の小屋の京劇くずれのような芝居を見たり、というくらいですぐ船に戻らなければならなかったので残念でした。なお、本屋を何軒かのぞきました

が装幀も何もない紙もよくない薄い本ばかりが多く、もちろん新中国のものは一冊も見えず、かえって日本の通俗雑誌やまた『人間の条

その次が香港でした。ここも昼前に上陸して夜十時までいただけですが、海岸沿いにイギリスが開いた大きな町が二筋ほどずうっと長くつらなっており、それを縦断して高台の方へせり上って行く細い幾筋もの道には中国人の住宅と商店がひしめいていて、さらにその向こうは高い山になっており、これがピクトリア山です。この山の途中にはなんとも美しい別荘がいくつもいくつもあって、これらはイギリス人がつくったものです。だいたい香港のあたりは空気が非常に澄んでいて、港におりたときから世界の印象がいちどに違ってしまったような印象を受けました。ものの色が実に鮮かに見えて、木の葉の色も空も石も建物や衣服なども、眼を洗われたようなさえた色をしていました。しっ氣と煤煙とが少ないためなのでしょう。原色の赤い色なんかを着ているおばあさんを見てもちっともいやな感じがしない。こうしたあざやかな色感には西欧でもずっと同様でした。こうした澄んだ空気の中に、きれいなイギリス人の別荘が並んでいるのが見える。かれらが長い間の植民地支配の中でつくってきた財産の大ききみないなものが、実にあらわな形でそこに示されるわけですね。とくにたいして、山のは

じの崖みたいなどころには、小さなバラックのような家がたくさん並んでいて、釜ヶ崎や山谷よりもっと貧しいように見える中国人たちの生活ぶりが見える。のちに香港の大商人とローマで話をするようになったが、そういう大商人もいるにしても、多くの香港在住中国人の生活は貧しいようです。

小原 政治情勢のざわめきのようなものは香港では感じられなかったですか。

小田切 ここでは文字通りの観光客として十時間ほどあちこち歩いただけだから、そういうことはちょっとわかりませんね。ただ、次に寄港したシンガポール(写真参照)は三日間いたということもありましたが、いくらかアジア・アフリカの新しい動きに通ずるようなものを感じました。シンガポールは独立をようやく実現して、独立記念式典が一昨年のたいへんはなやかにおこなわれ、その祝典の絵はがきは去年になってもまだ売っていたので買ってききましたが、独立は実にうれしいものだったらしいですね。もっとも、その二内部的には統一がうまく行かず、進歩的な政策をおさえようとする内外の動きに苦しんでいるようです。さいきん、すぐ隣のマレー半島との合同問題が起っていますが、このマレー

新しい民族文化の動きがいろいろと出はじめています。ぼくは、マレーの長ったらしいニュース映画をシンガポールの映画館で見ても感動しましたね。土侯国の連合体だから、これも英連邦内の一国として独立はしたけれども、多難な前途の重み自体がまだマレー人によくわかっていないというような感じがします。しかし個々の点で民族的な新しい進み方をしはじめている様子はニュース映画によく現れていました。もっとも、マレー領内に、ビザなしで自動車を入れるところにだけちょっと入ってみました、それだけでは何もわからない。マレー人の市場の様子がたのしかったです。レイシミみたいな果物を食ったり、マレー料理を食べたり、というくらいでした。

その次に寄港したのは、紅海の入口にあるアデンというイギリスの軍事要塞の町でした。木というものが一本もない。水の乏しい砂漠の町で、ほんらいアラビア人の町です。ここを見るのを楽しみにしていたのに、船が夜十時過ぎに着いて、それから上陸に手間どって、夜なかの一時過ぎになってやっと港の土をふむことができ、港から二キロほどの市内へタクシーで行ったんです。ところが、メINSTRIートへ到着したらね、その両側の

家々の前に縁台のようなものがズラリと並べてあって、それに毛布を敷いてアラビア人の男だけがひとりずつ寝ている。軽いものをかけてるものもあり、かけてないものもある。そして、その縁台の間には、ほとんど必ずヤギが寝ているのです。街路のまんなか寝ているヤギもいる。ヘッドライトをつけた自動車が徐行しながら行くと、その寝ているアラビア人たちが起き上ってモソモソしたり、道のまんなかにいたヤギが、ノソノソと起き上がって横へどいたり——こういうありさまなので、安眠妨害にきたようなもので市中はまわらないことにし、市外はというただまっ暗な岩山と砂原なので、さっそく港へ戻ることになりました。深夜のアラビア人街は、まのぬけたような、しかしいくらか無気味な感じでした。街角の土産品屋のところだけ、こうこうと明るく照明されていてアラビア人の青年が妙な英語で盛んに土産を買えとどなりたてる。なんとも異様な感じでしたね。土産品といってもちよつとした手工芸品以外は外国産の時計や日本製品らしい雑貨ばかりで、二、三軒ショウウインドーを明るくしているところをのぞいたら東芝の電気器具がならんでいました。一時間半ほどで船へ戻って、翌朝、明け

方に出發してしまつたから、ほんの短い時間の強烈な印象に終つてしまつて残念でしたけれども、市中までの二キロほどの道でヘッドライトと街燈とに照らし出されていた軍事要塞としてのアデンは、実に設備がととのえられて、紅海の入口をイギリスがしっかりとおさえているという様子があらわでした。



いよいよアラブの世界にぼくらの船が出入しはじめたわけですが、とにかくこのあたりはひどく暑い上に木も水もない。草もほとんどない。船が荷の積みおろしのおとす木の切れっ端などをアラビア人たちは争って拾ってゆきますが、これはたいへんな貴重品なんだそうです。そしてヤギが、着るものを提供したり、食べる肉を提供したり、その他じつにさまざまな役立っていてアラビア人の生活に切っても切れないものになっている。アラビア人の生活というものをほとんど知らなかったのが、アデンの以後、ジェッダやスエズやカイロやポートセイドやマドリッドなどでアラブ世界にふれてずいぶんいろいろのことを考えさせられました。アラブ人の内面生活は回教が支配しているわけですが、これについてぼくはほとんど何も知っていません。だいたい、いま回教徒は、世界中でなくとも三億以上いて、アジア・アフリカを中心にあちこちに分布している。香港にも、シンガポールにもいたはずなんだけれども、気がつきませんでした。モスクといわれる回教寺院はいくつも見ましたが。

船が次に寄港したのは、紅海のジェッダという港です。ジェッダともいい、よほどの地図

でないと出ていませんが、ここは回教の聖地になっているメッカへの入口にあたる町で、国としてはサウジアラビアです。このサウジアラビアという国は非常にやかましくて、ぼくと中村哲さんはビザをとってこなかったものだから、絶対上陸できない。日本で甘く考えていたのが失敗でした。それから、一般に船が港へ入るとその国の港の法律の支配を、船もそれに乗っている人も受けることになるわけですが、この国は音曲禁止、アルコール禁止ですから、船上の客もその規制を受けます。それで船が港に入る前に、事務長から、お酒を飲みたい人は早く飲んじまってください、写真機もうるさいからしまってください、それからレコードも一切かけられませんが、船に警官が入ってくることもなっています。という。妙な国だな、と思いました。とにかくこの国で何かの法に触れるとたえとばコソ泥などという小さい罪だと小指を一本落とすんだそうです。二度目やると、今度は二本目の指を切り、三度目には手をといてふうになる。重い罪だと手をちよん切る。

小原 ほうちようで切るんですか。

小田切 どうでしょうかね。罪がもっと重

いと腕をちよん切っちゃう。まさか、と言っ

ていたら、あとで本当だということがわかりました。とにかくこわい国で、ぼくはビザがなくて上陸できないのだから危険もないわけだけれども、同船した早稲田の商品学の毛利亮さんとフランス文学者の鈴木豊さんが日本でビザをとってきていて、上陸した。出かけてゆくときに、指を切られないようにして戻っていらっしやい、と言ったのだが、かれらは一時間くらいしてほうほうの体で船へ戻ってきた。全然親しみがもてなかったらしいのです。ぼくは残念でした。がなかつた。

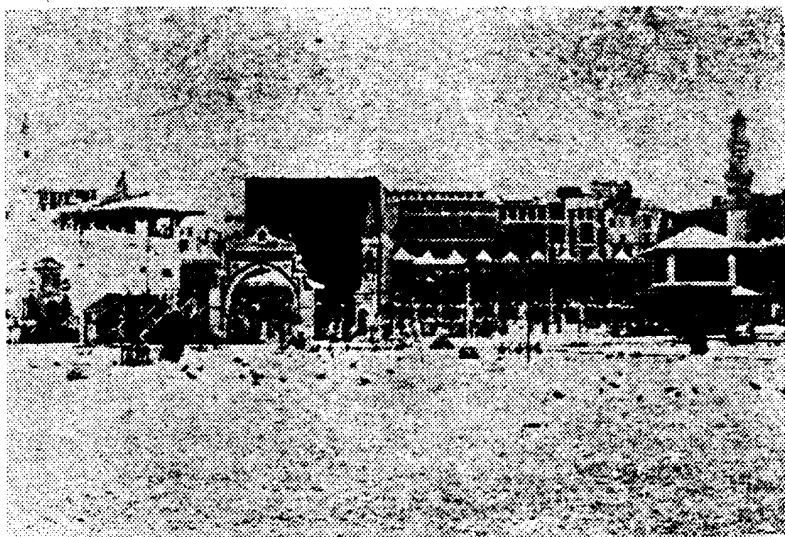
港で見ていると、メッカへ巡礼船がたくさん停泊している。世界に散らばっている回教徒は、一生に一度メッカ参りを祈ってくる。回教徒としてのつとめを果たしたことになる、本人としてもたいへんな生きがいを感じる。そのときも、巡礼船が、パキスタンやインドネシアやアフリカ各地からたくさん来ており、アラビア風の服装——インド人のように長い布を肩からかけたやつ、それを着たひとたちが、途中で使うものを大きな袋に入れてもち、それらの船の甲板の上にゴロゴロ寝ているのが見える。そういう船がたくさん港にとまっているのですから一種異様な感じでした。ぼくの船はこの港で一日停泊する

る。日本の商品は、アジア・アフリカの奥地にまで実にたくさん入っていて、このサウジアラビアで荷おろした商品の数だけでもたいへんなものですね。積荷をおろすについては、アラビア人の港湾労働者の手が必要で、アラビア人労働者がたくさん船に入ってきて働きました。ところが、かれらは四時になるとビタリと労働をやめてしまい、一斉にメッカのほうを向き、みなひれふしておじぎをはじめ。何度も頭を下げつつ長く祈っている。それを見ていたら、なるほど、親指のない労働者や小指のないのがおがんでいるんです。それから指が全体の半分くらいしかないような手をしているものもある。港湾労働者として働いているのだから、まあ、手は使えることは使えるんでしょうけれどもね。こうした処罰のやり方は、古いアジア的方法ということになるのでしょうか、回教についての法律と宗教との関係という問題は深刻な問題です。しかし、そういう問題をふくめて、回教というものについてあまりにもぼく自身が知っていないということをこんどの旅でつよく感じました。ぼくは一切の宗教を信じないけれども、キリスト教というものが、宗教と

のが、人類の精神史との関係で、非常にもおもしろいプラス・マイナスを示していること、また仏教についてもその人間認識のすばらしさや古代的空想力の見事さやインド、中国、日本の歴史との深い関係などということについては一応知っている。ところが、ジェッダの船上で、現に眼の前でひざまづいて、おがんでいる労働者たちの、その回教というものについて、自分がほとんどまったく何も知らなかったことについては衝撃のようなものを感じました。三億以上の人間の精神生活と社会生活を厳格に規定し、その人たちの精神的な生きがいや喜びやあるいは倫理を支配している宗教がここにある。いまアジア・アフリカの、ということは回教徒である人々を実にたくさんふくんだところの諸民族が、いわゆるA・A諸国として世界的に、巨大な、新しい動きをはじめていて、それにほくらも強い関心をもっていたはずで、しかもその回教の人々の内面生活については自分が何も知っていないということが判明したのです。それで、帰国してきてから、ポツポツ回教関係のものを讀んだり、『コーラン』などを讀みはじめたりしているところです。

なかなかむずかしいと思うんですけど、そういうような場所、近代化とか、あるいは現代文明というようなものですね。どういふふうに進んできているのかという、ちょっと、そういう印象はなにか……

小田切 それはね、ジェッダで上陸することができるとよかったんですけれどね。アフリカではいくらかそういうことがわかりました。ジェッダを出て紅海をわたり終ると、地中海に出る前にスエズ運河の入口に行く。スエズ運河を渡るのには、船でいたい一日かかります。その一日のあいだに、スエズの街からカイロまで自動車で行って、一泊してカイロからポートセイドに自動車で行き、そこで自分の船に戻るといふ二十四時間コースの遊覧業者がいて、その手でエジプトの一端をのぞきました。その経費は三十ドル余り、まあ一万円ちょっとです。おそらくカイロの町はすっかり見せて、そしてカイロのいい宿へ泊めて、そして食事も全部出して、それから、まずスエズからカイロまで百五十キロの間、ずっと砂漠ばかりのところを自動車をとばしました。鉄道もあり、また石油の送油管が鉄道とならんで百何十キロというもの、ず



ジエッダーメツカへの入口

と走っている。アメリカでは三千キロくらいの送油管を平気で走らせるというから、エジプトのは短いということになるのですが、しかし驚きましたね。―スエズの町を出はざれると、全然の砂漠です。砂漠だから、植物は何にもないのかと思ったら、小さな草がは

それがあちこちにはえていました。しかしそのほかは何にもないわけです。石のかけらがところどころちらばっているだけ。その中のりっぱな道路を走って、カイロの町に入るところになると、まず現われてくるのは兵營です。これはイスラエルにそなえての軍備だとエジプト人は言っていました。イスラエルはすぐそばで、エジプトとの間はいへんな仲です。むろんそれだけが目的の軍隊ではないわけですが、とにかくさんの兵營がずっと続いています。その兵營がおわると、カイロの市内に入る。さてカイロに入っても、あわただしい観光客にすぎないものだから、アラビア人たちに直接接するチャンスが少なくて困りました。ピラミッドやスフィンクスへ行ったときにたかってくるエジプト人だけに聞いていえば、これらは全部、日本でいえば雲助か、ごまのはえのたぐいなんです。おつりをごまかしたりチップをむりにたくさんにまき上げたり、というようなことばかりやっている。まったく油断ができない。船で聞かされていたことだけれども、実に、その通りなんです。もし、このことからだけエジプト人というものについての印象をいう

とになるけれども、むろんそれはホンの一面にすぎません。カイロの町を見ていると、ナイル川の兩岸のりっぱな道ぞいに近代建築の、それこそ非常に大きな、ほとんど雄大といっているような近代建築がずっと並んでいて、東京駅の前みたくもある。そして朝早くからホワイト・カラーの無数の勤め人たちがこれらのビルに通っている。大学には相当な数の学生が通っている。言語政策その他、ナシヨナリズムと近代化の動きはいろいろの形で示されています。

エジプトは、ナセルの手で一種のブルジョア革命をおこない、独立と近代化への道に進んだ。その前の王室というのが実にでたらめなことがかりやっていたことは有名ですが、その王宮が、カイロ市内にもあちこちにまだ残っている。めちやくちなことをやっていた王を追っばらって、ナセルがブルジョア革命をやったが、それはブルジョア民主主義革命ではなかったために、民衆自身の手による大きなまたは深い民主主義的な運動というものはどれほどともまた組織されていない。ナセルが軍人で、軍隊と民族資本を基盤に革命をやったわけですね。近代国家としての面目は

でない。

田中 エジプトというのは、もともとレセップス以来ヨーロッパの資本が入って、近代化されていた国家なんですから、ほかのアラブの国と比較されると、やっぱり進んでいるわけですか。

小田切 エジプトの場合、アンバランスが極端でした。貧しい人たちははなはだしく貧しくて遅れており、近代化されている面はまた、たいへん豪華で機能化されている。こういうギャップがあらわです。ピラミッドがつくられた時代の貧富のへだたり、文化のへだたりはこういう形ではいままた再生産されているといいでしょう。もっとも、逆にいえば一方での近代化のテンポはたいへん早いように見えます。朝ナイル河畔を歩き近代的ビル街に入っていたところで見えたエジプト人のホワイト・カラーの数はたいへんなものでした。官庁組織が整い、大経営組織が整っているということですね。ただ、こういうこともある。追いはらわれたイギリスの資本が、もう直接に表面では活動できないことになっているのだけれど、むかしのイギリス資本に使われていたエジプト人たちの名前で、実際は

たくさんあるという。だからイギリスとの関係にも微妙な点があるわけです。

田中 ナセルの革命以来、まだそういうことが続いているということだとしたら……

小田切 行きずりの観光者の眼にもうつるくらいにそれはあります。ぼくらを案内した観光業者の事務所のおいてあるカイロの商社のひとに聞いてみたら、そういう例はたくさんある、この商社もそうです、と答えるくらいなんだから……。

阪下 さっきのイスラム教の問題ですが、あれは、ナセルも時間になると礼拝するそうですね。その場合の……つまり独立運動というものと、それから、内面生活を規制しているイスラム教とがどう関連しあっているか。独立の一つのエネルギーとなっているような気がします……。

小田切 それはもちろんです。アラブ人のかつての栄光を回復しようという大衆的な根深い衝動は回教と結びつけられて内面的にも組織されているわけですから。ただし、回教と民族意識との結びつき方は、回教の人口の巨大なひろがりに対応して、国によってじつに様々です。同じく回教を奉ずる国と国との

立している。

田中 その国々の場合ですね。たとえばエーランの解釈なんていうのは、統一されてるわけでしょうかね。

小田切 そういうふうにはなっていないようです。こまかいことはよくわからないが。

田中 そうなってくると、日本で、やっぱり回教に対する研究というのは進んでないから、わからないということでしょうかね。

小田切 日本の回教研究は戦争中にやや進み、いままたようやく新しい展開を示しはじめたというところで、ぼくはそれらをまだ、どれほど勉強したわけでもないのですが、マホメットが死んだあとさまざまなジグザグを経ながらしだいに二系列にわかれ、一方のがわがキリスト教などに学びながら神学的な体系をだんだんつくってきた。この両派にさまざまな分化や重なり合いがあって回教内の対立がずっと繰り返されて、今日に至っている。この経過を一つ一つたどってゆけば、現在の社会的政治的問題とどうつながっているか、またはつながらないかがはっきりすると思いますかね。

ところで、カイロの博物館の前でバピルス

にお目にかかったときには、これは、ちょっと特別な気持がしましたね。ぼくらは紙というものに結びついて生きているし、とくに文学というものは、いまのところまだ紙の上の存在だし、ことに古典の場合は紙ときりはなすことができない。その紙が、この草からはじまったということになっているパピルスが

カイロ博物館前に行くとき現に目の前にはえているんです、一むら植えてあるだけだけれども。背の高い、日本の蘭草みたいなやつです。のちにイタリア南端のシチリア島に行ったときに、シラクサで一本失敬したときには胸がおどりました。シチリアのは、エジプトからずいぶんたくさん移し植えたのだそうであることは禁止されているのですが、折れているのを一本、番人の黙認を得て取った。これは非合法ということになるのでしょうか、番人のおかみさんの写真をとってあげたら日本人だということでたいへん親切になったのです。新聞紙のあいだに押し花のようにしても

って歩き、帰国するときの荷物のなかに入れたのですが、ちょうどその包みが途中で行方不明になっていてるのですが、それがくると、皆さんにパピルスの現物をお目にかけることが

この話をしたら、日本でも出版関係の博物館みたいなところに移し植えたのがあるとか聞いてガッカリしました。

小原 出版博物館？

小田切 そういうものが日本にもあるのだそうです。カイロの博物館というのは、すばらしいものでね。日本では、ぼくなども、これは千三百年前のものだとか、七百年前の仏像だとかいってたいへん遠い昔のものだという感じがしていたけれど、カイロへ行くと、これは二千八百年前のピラミッドだとか、三千年前のものだとかいうことになってしまつて、時間の観念がまったく変わってしまった。

小原 ちょっと、小田切さんのきょう聞か話だけど、阪下君の話からちょっと思い出したんですけど、私は、A・A諸国の文学というの、もう全然知らないわけですからけれども、民族独立とか、民族解放とかいうようなその大目的、大命題と、そのそれぞれのものについて、非常に不可解といていい、複雑な特殊現実ですね、民族的な。そういうものを掘りおこしてこようとする、そういうものが結びついてるわけなんですか。

とも知っていないのですけれども、この前、北ベトナムの短篇小説「初恋」というのを感じ動して読んだ。インドシナ戦争のときの、北ベトナムの若い男女の、戦争によってひきこ

かれた恋のことを書いているのですが、国木田独歩の短篇の、澄んだ美しい味わいと似ていて、しかももっと激しくて、実にナイーヴないいものでした。高度に発達した資本主義国とは全然違う性質の新しい素朴さをもった文学でした。これはヴェトナムですが、さて回教国ではどういうことになっていきますかね、アラビア人はむかし「千一夜」をつくり、またオマル・カイヤムの抒情詩を生んだが、いまたとえばトルコではナジーム・ヒクメットらをふくむ多くの詩人作家がいる。パリで会ったイスタンブール大学の助手の若い女性からトルコ文学の現状を聞いたが、その他の回教国の文学についてはアジア・アフリカ作家会議の報告などで一応のところはわかる。それ以上はぼくにはとてもわかりません。ただ、いろいろ動きがはじまっている、それは民族問題と切実に結びついた新しい性質のもののようにです。なお、アラビア語というのが、ミミズのぬただったような字

トでは、ナセルの時代になってから、数字ま
でみんなアラビア風のものにしてしまつて—
いまのアラビア語の数字は、カギにしたり、
ぬたかったりする奇妙な数字です。全然わか
らない。

小原 そうですか。アラビア数字というの
は、われわれが使っているあれが、アラビア
数字かと……

小田切 いまのエジプトのはあれじゃない
んです。アラブ民族主義と結びついて、そう
いう文字を使うようになったわけで、習得は
なかなかむずかしそうです、しかし、日本で
もそういうものをちゃんとやる人が、これか
らたくさん出てこなければ困ると思う。中国

などをべつとすれば、アジア・アフリカにつ
いては文化、文学の面でも日本ではほとんど
知られていないので、これからはそういう面
を研究する人もたくさん出てくるかと思
いますね。

小原 それからどこに行きましたか。

小田切 カイロを出て、ポートセイドへ向
ったのですが、灌漑用水をかねた運河にずう
っと沿うてつくられた道を、百キロ近いスピ
ードでとばしました。途中をずっと見ている
と、この運河の周辺にだけ砂漠に向って一、
二キロくらいまで、両側に耕作した土地が続
いている。帯のように続くこの緑の地帯―耕
地と森ですが―のそとは全部砂漠なんです。

これは治水工事によってできた緑地ですね。
これだけの治水事業をやった人間は、エジブ
ト人にとっては、たいへんなありがたい人間
だったでしょう。百七十キロくらいの長さに
わたるこの事業は、一方でまた専制的な力を
ふるった結果でもあるにそういない。とにか
くよほど大きな権力の集中がなければできそ
うもないものです。

阪下 もっといろいろとお聞きしたいので
すが、こんどの号にのせられるぶんはもう超
過したくらいなので、また次の機会というこ
とにして頂きましょう。それでは、どうもあ
りがとうございました。

正 誤 表 (浅茅下)

誤		頁・番号
屋花 をくら 民部卿為家第 かずのかずに 嵐吹らし 思はなへに 寂連 袖たてたり うらとけてたぬ かぐ山の時 成に成にけるかな	尾花 をくら 民部卿為家。第 かずかに 嵐吹らし 思はなくに 寂蓮 袖たてけり うらとけてかたぬ かぐ山の時鳥 成にけるかな	49 下 9 50 下 17 51 上 15 51 上 16 52 上 23 52 上 36 55 上 36 55 下 49 56 上 38 56 上 38 58 上 47 三
正		頁・番号
おやめの こぬ下を 佐夜中山 あしがらの いささめに 寒る降るらし 待となつけそ いものが嶋	あやめの こぬ人を 佐夜中山 後撰 あしがらの 万一 いささめに 寒く降るらし 待となつけそ いものが嶋	60 上 57 62 上 67 63 下 98 64 下 105 67 下 124 69 上 122 69 下 142 73 下 166